保育実践における子どもの発達と絵本の活用についての一考察

長　根　利紀代

Ⅰ　はじめに

近年における豊かな絵本環境は、家庭の中に日常的に浸透し、どの家庭にも絵本は豊富に買い整えられて今や子育てには欠かせないものとなっている。そして、保護者も立派に読み聞かせのベテランとなっている現状がある。絵本は園生活でも欠くべからざる教具として位置づけられ、保育にさまざまな形で活用されているが、園生活においては、子どもの発達支援という保育の目的を明確にして「絵本」を扱うことが求められる。しかし、絵本の扱いに対しては、活動の前後の間つなぎ的扱いが目立ち、実習などを視野において保育科の学生から毎年のように浮上する質問は「絵本は抑揚をつけて読むべきかどうか」という「絵本の読み聞かせ」に関する「読み方」が主流である。これは、文化財として位置づけた文献、研究、現場の現状や保育者の活動、先輩からのアドバイスなどさまざまな意見が行き交うことで学生が困惑するようである。その結果、実習において抑揚をつけずに読んで2歳児がばらばらになってしまった。本に示された対象年齢を重視して退屈がられたり担任から幼稚だと指導を受け戸惑うなど、簡単に使いこなせると思っていた学生や子どもにとって一番身近な絵本が保育としては思ったほど簡単ではないことに気付かされることになる。それらは本来「主役」である「子どものための保育」において絵本の位置づけが教具であり教材として活用する場合の明確な視点を捉えておらず、「絵本の読み聞かせをするのが保育」という不十分な保育理解によるものと考える。そこで、「絵本」に対する保育の中での捉え方について研究し、かって筆者自身が実践した事例を取り上げ、保育における子どもの発達に即した教具・教材としての絵本活用の在り方について考察し今後の学生指導の充実を図りたい。

Ⅱ　研究の方法と内容

本研究は絵本を活用した保育の実践事例を中心にして進めることとし、幼児の発達と絵本を媒介にした実践事例をVHSにより考察する。このVTRはこの年の園児に障害児はじめ入園式以来3歳児に気がかりな子どもが目立ったことからビデオカメラで撮影し子どもの観察と適切な保育の研究をするため、新卒を中心に園内研修用に記録していたもののひとつである。もちろん保護者会などでこのビデオ撮影は説明済みである。また、VTRの他、文献により「絵本の位置づけ」、「教師の役割」、「子どもの発達過程」を確認することにより、保育の中での様々な場面における個々の子どもの発達を保育者がどう捉え援助していくべきかについて調査する。そこから、様々な実践の場面における子どもの姿の読み取りと保育者の援助とのかかわりについて考察することで絵本を通して子どもの発達を支援できる保育の方法を研究する。

Ⅲ　結果と考察

1．実践事例（表1）
―子ども理解と絵本を媒体にした発達援助

(1)　気がかりな子どもK男について

時期：1990年新学期　4月入園後第2週

対象：3歳児新入園児K男

教育方針：キリスト教保育で、主として年齢別のクラス単位での活動を基本としているが年少から年長まで一緒に活動することが多く縦のつながりを重視する。保育内容はフレーベル主義を中心として自然環境に配慮し、恩物やリズム遊びを取り入れている。保育内容により、活動形態は一斉の他、コーナーなど自由形態を組み合わせて保育を進める。

主な保育の流れ：礼拝とモーニングトーク→造形活動→給食→リズム遊びやゲーム（朝の集会、リズム遊びやゲームはサークル活動で

縦割り、造形活動や給食は主にクラス毎で行うことが多い）

3歳児クラス：園児数25名　保育室は保育内容により2クラスに分ける。

〈全体的な子どもの姿〉

新学期であることから、園全体的に不安定で落ち着かなくいが、子どもたちは次第に新しい環境になれそれぞれが生活の仕方やリズムを身に付ける時期。特に新入園児3歳児はそれぞれがこれまでに生活経験で身に付けたその子なりの価値観と方法で園の環境や生活への適応を模索し自分のやり方や思いが強い。したがって、子どもそれれぞれの生活の仕方にこだわりやその子なりのペースがあることを考慮し、個人的に適応できるよう教師全体で援助を手分けして心がける。在園児は進入園児の面倒見がよい。

〈入園以来の主なK男の姿〉

家族構成は両親の他、祖父母と歳の離れた小学生の姉が一人。K男は1月生まれで過保護的傾向が見られる。笑顔もあまり見られず表情に乏しい。何事にも動作が遅くじっと立っていることが多い。話は聞いていてもほとんど返事は無いが理解はできる。気が向けば自分の言いたいことはよくしゃべるが文句が多い。相手の意見はあまり受け入れようとしない。入園後は他の園児の様子や遊びの観察が目立ち、遊びは傍観的で自分からやろうという主体性に乏しい。絵本を見ることやウサギの餌やりを好んでいる。登園時にはしばしば母親との別れを拒む。

〈この時期の環境の構成〉

1. 登園時、基本的に天気のよい日は園庭で遊ぶように指導しているが新学期のうちは子どもの好みによって保育室でも遊ぶ
2. 室内では机といすが設置してあり各園児の席には目印のシールと名前を貼り各児毎に同種のシールがそれぞれのロッカー、道具箱、靴箱などに貼ってありも文字が読めなくても自立できるよう準備してある
3. 一応室内のおもちゃは棚など所定の位置に片付けてあるが子どもが自分で出すことはできる
4. 保育室はアコーデオンカーテンにしてあり他のクラスの様子も見えオープンな雰囲気にしてあるが必要に応じて担任が自由に開け閉めする
5. 保育室の座席は新入園の不安定な子どもたちに心と体の「居場所」を作るため、入園以来指定席にしてある。並び順や席順は基本的に背の順に指定し1学期ごとに見直す。また、保育の内容や必要に応じて変更するが、特に新入園児は子どもの情緒が安定し、クラスの雰囲気が落ち着くまでは変えないよう配慮している
6. 新学期の保育の流れは主流になるものをゆっくり形付けていくが、個々の子どもの身支度の手順、生活のリズムなどについては、一作業ずつ身につくように指導し、様子を見て数日ごとに手順や作業を増やし子どもの発達に対応する中で徐々に全体的な基本的流れを整え、毎日の生活のリズムを整えていく
7. 室内外共、当分おもちゃやものの置き場所は変えない
8. 最初は動物好きの子どもたちのため、ウサギは目立つ位置に設定し、餌をやりやりやすいようにケージ近くに餌を置いた。餌は園庭の草（ハコベやタンポポなど）を主に用意し、やがて子ども自身で園庭から草を選んで与えられるようにした。また、子どもが慣れたところでウサギを所定の庭のコーナーのウサギ小屋に戻し、草も小屋から離れた位置に草取りをせず残しておき、子どもの活動的な動きを引き出すようにした。さらに、状況が許せばウサギは一定時間園庭に放し、子どもが自由にかかわることができるようにした。

〈3歳児4月の保育のねらい〉

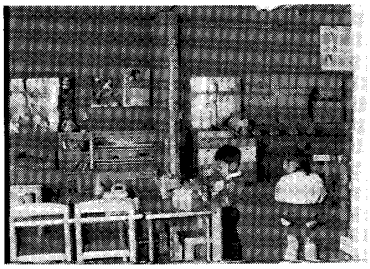
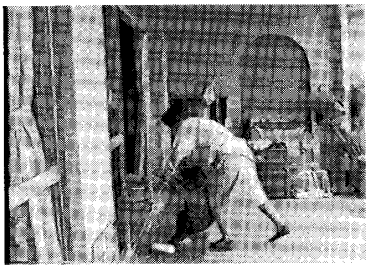
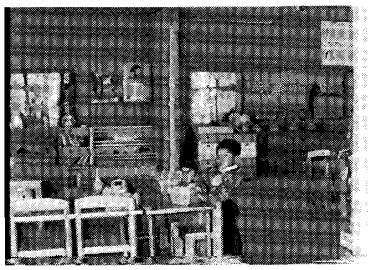
- 子どもたちはその子なりに園生活に親しみをもち喜んで通う
- 気に入った遊びを見つけのびのび楽しむ
- 徐々に生活のリズムを身に付ける
- 様々な活動を体験し園生活の楽しさを味わう
- 翌日への園生活に期待を持つ

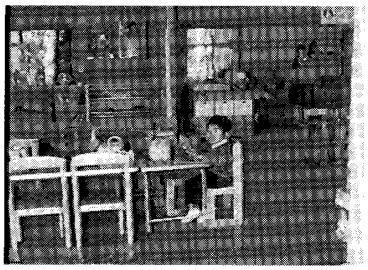
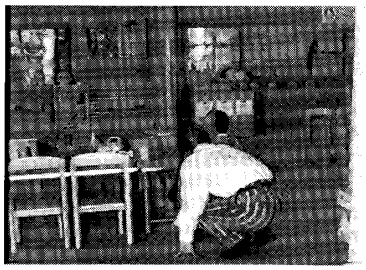
〈本実践における結果からの考察〉

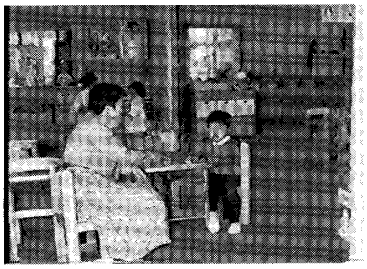
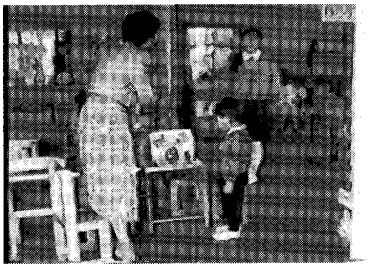
それぞれ活動の区切りになる項目について「K男の姿」は「①、②、③」、「保育者の援助」は「あ、い、う、」で示して解説し考察する。また、筆者を「保育者」として活動を記述した。ここでは、「K男の姿」を中心に考察する。

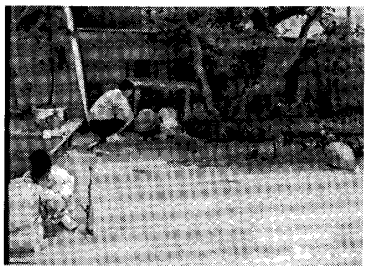
〈K男にかかわる絵本を活用した保育実践〉

表1

時間	環境の構成	K男の姿	保育者の援助
8:40 8:43	3歳児の保育室には人数分の机と椅子が整えられており席は指定で机には各児の目印用にシールと氏名が貼ってある 絵本は棚とブックスタンドが設置してあり園庭にもテラスにブックコーナーが特設してある K男の様子をクラスメイトのA子が怪訝そうにしばらく見つめていて立ち去る 	① 母親と手をつなぎ保育室内まで同伴し、上靴を履いた時点で母親が帰ろうとするとテラスまで追いかけ泣き叫びながらすがり、引き離そうとする母親をたたくなどして抵抗する ② K男の席に下ろしたとたんに泣き止みバスケットのもち手をパタパタ前後にたたいている ③ クラスメイトのA子に無関心無言で立ったままバスケットのふたの開け閉めしを始めるふたを開け閉めしながら園庭の様子を見ているふたを開けたまま何か考えている	ア、見守っていたが泣き叫んで後を追うので主任が母親からK男を引き取り室内に抱きいれる イ、主任がK男を室内のK男の席の前に降ろし立ち去る  K男の様子に「なーに？…」と声を掛ける
8:44		「シール」とつぶやくように保育者に言う ふたを開け閉めしながらぼんやり外を見て考えている ぼんやり外を見ている	ウ、シールと言う言葉から毎朝行う出席ノートのシール貼りをしたいのかと思いテラスから声をかける「シールは後よ。バスケット片付けて外にいらっしゃい。」 「外へ行って遊ぼ、外へいらっしゃい」
8:45	保育者は登園してきた子どもたち一人一人に明るい声で元気よく朝の挨拶を交わし活気ある雰囲気をかもし出すことに勤めている	保育者のほうをじっと見る ④「ウサギさんにえさ」をきっかけに突如左手のコーナー（テラス側）においてあるブックスタンドに近づき絵本を選び始める選んだ絵本を胸に抱きテラスにいる保育者に近づいて「これがいいの」 「○☆＊▼＃…」とつぶやく	エ、反応がないので「K男君外においで、ウサギさんにえさ上げなさい」 「うん？…いいわよ、絵本読みなさい」

	 他児が登園し室内を行き来する	⑤ 自分の席に戻り机のうえのバスケットを上に寄せ椅子を出して座り一応絵本を広げページをめくったりするがきょろきょろ人待ち顔で落ち着かず自分で読もうとしない 学生の様子を注視し近づくと絵本を閉じてしまう	K男の言葉が正確に聞き取れないがその様子から絵本を読みたいと言っていると判断して「うん？いいわよ」と答える 見守りながら他の登園園児に明るく朝の声かけを続けながら見守る オ、実習生に読んであげるよう指導、実習生が小走りに近づく
8:46		顔を絵本で隠してそっぽを向いてしまう 学生が戻ると再び苛立ちの気持ちがあるように絵本をもて遊んでその後も周りを見ている	実習生がそばにかがみ顔を覗き込む K男の様子に学生に戻るように指導し学生がそばを離れる
		⑥ 人の気を引くような動作で人待ち顔が続く 横を向いて近くの保育者に独り言か何か声を出して話すようなそぶり	「K男君、絵本一人で見るの？」「それじゃあゆっくり読んでね」 カ、見守っていたが本人の様子から読んでほしがっていると判断し保育者が徐々にそばに近づき拒否反応がないのでそば腰掛ける
8:47	登園児が増えてきて回りが活気付いてくる	保育者が近づくとこちらに姿勢を向けて向かい合う 本を読んでもらう体勢になり自分でページをめくる	絵本に触れてよいか慎重に観察しながらかかわってみる
8:49	K男と保育者の様子を見た4歳女児Y子がそばに来てK男の後ろに立ち様子を見ていたが、保育者にかかわれるよう回り込んでK男との間に来て上靴をとんとんしているので保育者が声をかけ軽く肩に触れる程度のスキンシップをもつとY子は去る 登園児がさらに増加し活気付いてくる	 保育者の問いかけに積極的に答える 時には自分でめくったり保育者に任せたりする K男も活発に対応してくる 知ってることや思ったことも言う 楽しそうに積極的な態度で口数も増え動作も活気付く	観察絵本だったのでなぞなぞ形式で問いかけ、K男の回答に「あーそうかー」と対応しながら絵本に触れてみる。 再び「これなーに」と問いかけながら絵本の方向をK男の方に向け読むというよりは絵本を媒介に会話する 保育者は次第に問いかけの言葉のトーンを上げ姿勢や指の動きもさらに動的な雰囲気を強め返答を促しながらK男から活動的な態度を引き出すようにする 保育者の言葉は少なめに本人の話すチャンスを多くする 保育者はほとんど手を出さず本人に扱いを任せ会話や問いかけも最低限にとどめる
8:50	4歳女児M子がそばにきて「先生何やってるの」と聞くので「本読んでるの」と答えているとY子が戻ってきて2人で絵本を覗き込むので少し声を大きくしてみんなに聞こえるよう配慮 本に描かれている果物や野菜を「おいしそう」と述べた後で子どもたちに見立て「これK男くんでしょう、これY子ちゃん、M子ちゃんこれ。トマトかーわいい	⑦ 他児が寄ってきてもK男は特に嫌がるそぶりは見せず絵本を見ている	

	い、食べちゃおう」と食べるまねをすると本人が「私もおいしいよ」と言うので「どれどれ、食べてみよ。おいで」と手をとって軽く引っ張ってみるが拒否しないので引き寄せて抱きしめるなどスキンシップをもつ。 その様子を見ていたＹ子が絵本の野菜を食べる真似をしておりＭ子が終わるとさらに保育者の目を引くよう食べる動作を見せるのでＹ子も抱き寄せスキンシップなど求められるに従い女児たちとかかわりを続ける そこに毎朝軽い登園拒否をしていた３歳男児Ｄ男が話しかけ登園時毎朝ぐずるＤ男が明るく話しかけてきたのでスキンシップと共にＤ男に挨拶程度にかかわる 女児の一人がお便り袋を持ったままなので片付けてくるよう指導し	保育者と他事とのかかわりを受け入れ同調するが自分から他児にかかわろうとはしない マイペースで一人絵本を見続けている 保育者が女児たちを抱き寄せたときはＫ男も笑顔で注視し雰囲気に興奮して絵本を閉じたり開いたりくるくる回転させたりしたが気持ちがおさまるとまた一人絵本をめくって他児とかかわろうとはしない	キ、４歳女児の思いも受け入れながらＫ男と他児との交流を引き出せるようより声や動作を明るく動的に振舞う 他児とのかかわりを通して雰囲気を動的にし気持ちが外に向かうよう表現を引き出すことに配慮する
8:52	保育者も立って場所を示そうとして見せる 登園する園児が増え雰囲気が活気付いてくる ４歳女児たちは他の子どもと自分たちで絵本を見ている	⑧ 一人で絵本を見続けている 保育者が女児とのかかわる間に１冊目を見終わると自分で次の絵本を選びに行き、席を立っていた保育者に見せ誘うので保育者が先立って席に戻るが着席が横すわりに変化する 絵本の扱いが煩雑になりめくり方もスピードが増すがページによっては目を留め保育者と言葉を交わすが姿勢は横すわりのまま	ク、保育者は落ち着いて対応し性急にＫ男を外に出す状況にならないよう配慮しＫ男の自然な気持ちの流れを優先する 落ち着いて着席したままＫ男が絵本を選択して戻るのを待ち必要以上にＫ男を刺激しないよう配慮する 相変わらず読むというよりは絵本を媒介にした会話的に進める
8:54	登園してくる子どもは身支度を整えると園庭に向かう 	⑨ ２冊目を見終わると再び席を立ち３冊目の絵本を選んで戻ると保育者に渡すが椅子には座らず机にもたれかかった程度で片足を掛けるか立ったまま絵本を見続ける	 ケ、本人の話をよく聞き担任を呼んで本人の前で確認する
8:55	担任を呼び寄せてＫ男の気がかりを解決に導く 	⑩ やがて集中力は散漫になりあたりをきょろきょろし自分の机に貼ってあった名札がなくなったことを保育者に訴える。 保育者が担任を呼んで確認し取れた名札が廊下の棚に置いてある事を確認し付け直してくれることが分かる	取れた名札がちゃんとあることときちんと担任が付け直してくれることを確認でき安心できることに配慮する コ、活発な動きを引き出し気持ちを開放的にするため名札を自分で取りに行くよう促し保育者は椅子を戻しテラスに戻る

8:57	K男に対応しながら他の子どものとのかかわりを続ける 	名札のある場所へ小走りで取りに行く 笑顔と共に小走りで名札があったことを報告しに戻ってきた ⑪「ウサギさんと遊ぶ」と答える 本も椅子も片付けないで小走りでロッカーに行ってしまう 担任に伴われ絵本をラックに戻すと椅子を片付けず園庭に行く	サ、本人が名札があったと報告するので「あった？ よかったねー」と共感し、「K君、また絵本を読む、それともウサギさんと遊ぶ？どうする？」と問いかける 「じゃあ外に出ておいで。白い靴片付けて。もう白い靴（上履き）入れるとこもう分かった？」 「本片付けて！ K君」
9:01		担任に伴われ外に行きウサギにハコベを小走りで取りに行っては与えることを繰り返す ⑫ 担任からは離れられないが遊びは徐々にボール投げなど動的な遊びへと広がりを見せていく	シ、担任はK男の前を軽い足取りでウサギ小屋に向かいK男が小走りで後を追う

① 入園当時からK男は母親との別れ際に抵抗を見せていたが、登園時には、特に問題が無い限り母親と話し合ってタイミングを見て引き取るよう了解し合っていたし、引き取った後もぐずりは長引かず引き離したほうが効果的に活動する様子が見られると予測していたことから主任は「ア」のように母親から強引に引き取った。K男には必要以上依頼心を助長しないよう配慮することを職員間で話し合った上で対応していたがK男が席に抱き下ろされた途端泣き止んだのは入園当初から決まっていた「自分の席」がK男の「居場所」としてK男の中に浸透していたことで安堵感がもて、自分の置かれた状況判断も出来ていたことによると考えた。また、主任が「イ」のように直後に立ち去ったのは依頼心や甘えを出せないよう一人にした。

② バスケットのもち手をパタパタたたいていたのは彼なりの情緒の安定を図る方法と思い見守った。そして次第に落ち着いていく姿が捉えられた。

③ バスケットのふたの開け閉めでシールを貼る意思を示したのはK男なりに園生活の仕方を理解し、「シール」という発言によりK男は前向きにいつもやるべきことを意識し実行しようとする意志が見られると理解していた。また、じっと園庭をみていたことも他児のように遊びたいという感触を得たので保育者は「ウ」のようにその方向で援助を進めていくことにした

④ 保育者の援助「エ」の「ウサギさんにえさ」は日頃のK男の姿からウサギに興味を持っていることを把握していたことで遊びに向かうK男の気持ちをほぐして活動への意欲を引き出すきっかけとした。しかし、K男はすぐには外に向かわず絵本スタンドで絵本選びをするという行動にでた。そして、保育者に言葉がけをしている。また、自分の席に戻っても一人で絵本に見入るのではなく、読んでもらうという意志を示している。こうした動きはK男なりの心を広げる方法へのこだわりがあったことが後のかかわりから見出せる。しかし、ここではまだ手さぐり状態での対応であった。

⑤ 保育者の援助「オ」はK男の様子から読んでもらうことを求めていると判断し実習生を向かわせたが明確に拒否されて判断に戸惑った。そこで一端読んでもらうことを求めていなかったかと思い直したが、さらにK男の様子から人待ち顔が見受けられることから保育者自身で対応することとした。

⑥　実習生の対応結果を踏まえて援助「カ」のように直線的にならぬよう徐々に観察から本人の真情を探りつつ近かづきＫ男のそばに座った。その間は拒否反応も無く、姿勢はこちらに向かい保育者とかかわる意志が見えたが３歳児のこだわりも予測できたことからすぐには絵本に手を触れず様子をみながらかかわり方を工夫した。絵本の内容を媒介にしあえて読むことをせず「これはなーに」と絵を指差しで示し会話形式でＫ男から言葉や動きを引き出すことを目的にかかわり、Ｋ男の気持ちを探ったが本人も絵本の世界に入り込むよりは気持ちが外遊びに向いていることが感じ取れた。そこで、あせらず徐々にＫ男の気持ちの流れに即するよう心がけた。ここでＫ男が選択した絵本は「観察絵本」だったことから会話がスムーズに引き出せた。

⑦　４歳女児や３歳男児が保育者にかかわってきてもＫ男は特に嫌がらず時には笑顔も見せ興味は見せるが自分からかかわろうとはしない。保育者は「キ」のように周りの人的環境からさらに動的な活動をＫ男から引き出そうとしたが自分の絵本とのかかわりから離れることはなかった。しかし、絵本にこだわっていながらも徐々に絵本に向かう姿勢は変化していった。

⑧　その顕著な変化はまずＫ男の姿勢に現れた。最初はきちんと自ら机に向かって着席していたＫ男だったが、２冊目を選択して再び自分の席に戻ると座り方が横すわりになり絵本を見る間中その姿勢は続いた。絵本に向かう姿勢も集中力が薄れ落ち着きがなくなっていった。これまでは保育者も声のトーンを高くし動的な雰囲気を心がけてきたが、ここからは援助「ク」のようにかえってＫ男から出てくる雰囲気を邪魔しないよう抑えたかかわり方を心がけた。

⑨　Ｋ男はどんどん態度の変化を加速していった。３冊目を選択して席に戻ると立ったまま絵本を見ようとした。途中片足を曲げたりしながらも絵本にはこだわったがその態度はますます散漫になっていった。

⑩　まるで上の空になっていった絵本とのかかわりであったが、その内日頃から気にしていたのであろう自分の机の名札が取れていることに話題を移してきた。そこで保育者も援助「ケ」のようにＫ男の気持ちに沿いたって担任を呼びＫ男の前で確認し本人の疑問や不満に回答し本人の納得を取り付けた。そのとき援助「コ」のようにあえてＫ男自ら廊下の棚にある名札を確認しに行くよう仕向けＫ男の動きが前向きに活動できるきっかけとした。

⑪　やがて、保育者の援助「サ」のように選択を促す問いかけに外に出ることを決定したＫ男は、片付けは不完全だったがあえて完全を求めず活動を促した。本来ならしつけの段階で細かい指導が求められるべきであるが、ここでは本人の気持ちの流れを妨げない援助を優先した。しかし子どもが「外に出る」に気持ちが向かうとき「椅子を元に戻す」→「本を片付ける」→「上靴を片付け外靴を持ってくる」→「正しい位置できちんと履く」を自然な子どもの活動の流れの中でひとつずつ気づけるよう援助するのが新学期の大切な指導である。しかし、ここでは担任が新卒であったことから活動を妨げない流れの中で指導することが難しい。それは担任自身の視野が狭く複数の子どもの活動に気づけない状態のまま子どもが自己流の生活習慣をその子のやり方で身に付けてしまうことが多いことによる。子どもは一度身に付けたことを修正するのが非常に困惑する。したがって、一番被害を受けるのは子どもたちであることから、新卒への経験者からの援助が不可欠である。

⑫　自分の意思で決定したとしても、ただ一人での活動を促せばＫ男のペースで動的になった意欲が減少する可能性がある。Ｋ男の意思を持続させるためには保育者の援助が不可欠である。ここで担任は援助「シ」のようにＫ男の目前を軽やかに小走りでウサギ小屋に向かっている。ここで手をつながなかったことや後ろからついていかなかったことがよい結果を引き出し、Ｋ男はウサギ小屋に着くと間もなく近くにえさとして残してあるハコベを取りに小走りで行き来することができた。そして次第に砂遊び、ボール遊びへと移っていっている。

2．絵本の位置づけ

(1) 幼稚園設備基準における位置づけ

絵本については、幼稚園設備基準において、「最低限必要であると考えられる園具、教具」の中に位置づけられている。しかし、これまでの幼稚園設置基準が時代に合わなくなってきた現状や各幼稚園での園具・教具の選択が画一的になっていることを踏まえ、1995年（平成2年）には「園具・教具に関する規定は設置基準の改定」として規定が大綱化された。そして、各園なりに創意工夫し整備することが求められるようになった。こうした中、1996年には「時代の進展に応じて各幼稚園に求められる整備の創意工夫の参考」として指針となる報告書によって「幼稚園における園具・教具の整備の在り方について」が示された。これらは、幼児の発達に必要な体験を得るために、保育施設で物的環境として備えるものを、教育上、保健衛生上必要とするものを整備するとして示されている。それらは、ア、主に体を動かして遊ぶことを目的としたもの、イ、主に身近な自然に親しむことを目的としたもの、ウ、主に様々な表現を楽しむことを目的としたもの、エ、主に身近な情緒に触れる目的としたもの、オ、主に園生活を送るために必要なものなどの園具・教具である。このうち、「エ、主に身近な情緒に触れる目的とした園具・教具」として紙しばい、テレビ受像機、OHP，CDプレーヤー、映写機などと共に「絵本」が挙げられている。ここでの〈絵本、物語本、図鑑、紙しばい等〉での整備上の留意事項として、「・幼児は、絵本、物語本、図鑑、紙しばい等を読んでもらったり、一人であるいは友達と一緒に見たりしながら、絵や写真やストーリーを楽しみ、想像の世界を広げたり、身近な動植物を調べて確かめたり、生活や遊びの中に取り入れたりする。幼児の興味や関心に即して、絵本、物語本、図鑑、紙しばい等にかかわることができるよう、多様な題材や内容のものを整備することが大切である。」と述べている。こうした点から見ると、各園の実情や時期、子どもの発達の状況によって環境整備に柔軟性を持たせることは言うまでも無い。特に近年の多様化された子どもの生活体験を考慮し、新学期の子どもそれぞれの発達を理解して個々に対応できる園具・教具を精選し教育環境を整えることは保育の基礎作りとなる。そしてそれは保育を進める中で子どもの発達の方向により見直すことも必要であろう。そうした子どもの「身近な情緒に触れる教具」として絵本の教育的意味を把握し、日々の保育の中にその効果を充分発揮できる保育の計画が求められる。また、ここでは絵本などを置く場所について、「幼児が自由に取り出したり片付けたりできるような本棚を整備したり、落ち着いて楽しめるような雰囲気を作るなど、場の作り方を工夫することが大切である。」と述べられている。本事例でも新学期の子どもの発達を考慮し、保育室のコーナーに絵本の棚を設置し数を少なめにして出し入れが容易になるよう配慮し、反対側にはブックスタンドで慣れない子どもでも容易に好みの絵本が目に留まるように整備し、さらには園庭のテラスに絵本コーナーを準備し、部屋の出入りに時間のかかる子どもや活動に疲れた時の休憩所、友達との静かなかかわりの場として子どもの体力や遊びのリズムを考慮した設定がなされている[1]。

(2) 教材として

「教材」は、「教材・教具」として「保育用語辞典」などに「幼児の成長を支えるために媒体となる、物や状況、事柄を含む」ものであると記述してあり、絵本は保育においては「教具」として、「園具」と共にハード面としての「教材」でもある事が示されている。ソフト面ではゲームや歌、行事、園庭の自然環境、子どものトラブルなども教材として捉え、さまざまな教材や素材を整え、効果的に活用して幼児の発達を支援できるよう保育のあり方が求められている[2]。

また、保育現場における「教材」は「保育教材」として「保育のねらいを達成するための具体的な保育過程の中で、幼児の発達段階に応じた保育者と幼児の間の媒体」であるとされている。さらに、「保育者と幼児の媒介をして、保育活動を展開させる材料としての役割を果たしているあらゆる文化的な素材が保育教材」と記述され、「保育の場における保育教材は、人格形成に重要な意味をもつ幼児期の子どもが、自立性、社会性、創造性などを培養していくための、極めて大きな役割をになっている。」と明記されている。そしてこれが

「保育教材の特性」として、「知識・技術の獲得を主目的にしている学校教育と異なり、保育の場において保育教材といわれるゆえんである」述べられている。さらに、ここでは、「保育教材の完成品」として「フレーベルの恩物」や「モンテッソリー教具」を上げている[3]。

この点から見ると、本事例は絵本本来の教育効果とは目的をことにして子どもの発達を援助しているが、K男のこれまでの生活体験を考慮しK男が自ら選んだ「絵本という教材」を媒体としてK男の心情に配慮した援助で活動を広げていった。　ここで確認されたように、保育の中では園具・教具、また、教材として絵本を捉えながら、子どもの発達を支援する「媒体」としての絵本の活用法も視野に入れ援助のあり方を工夫することが求められることが分かる。

3．保育における園具・教具の活用

平成8年「幼稚園における園具・教具の整備の在り方について（報告）」に「第1章総則　第1節」の「③園具・教具の活用とその広がり」において、どのように子ども理解を深め保育を展開していくことが大切か記述されている。その中には「一つの教具でも、一人一人の幼児にとって、また、一人の幼児でもその発達の過程によって、そのもつ意味がいろいろに変わってくる。このような園具・教具にかかわるそれぞれの幼児の姿を理解し、その幼児にとって今その園具・教具がどのような意味をもっているのかを考慮し、援助していくことが大切である。」と記述されている。さらに、「第2節　園具・教具の整備に当たっての基本的な留意事項」の「1、長期的・総合的な視点を持った整備」の「・幼児期の発達の特性に応じて的確かつ弾力的に整備することが重要である。」、や「3、配置」の「・園具・用具の配置が、生活や遊びの中で幼児の動線に影響を与えることに配慮して整備することが重要である。」、また、「4、収納」の「・収納に当たっては、効果的な収納を考慮することが重要であるとともに、遊びの一環として幼児自身が出し入れしやすいように配慮することが望ましい。」とある。さらに、「第2章　園具・教具の整備上の留意事項」では、「「園具・教具を整備する際にもその本来の目的や機能のみを考慮するのではなく、幼児のかかわり方の多様性を予測して整備することが重要である。」と述べている。そこで、保育者は子どもが園具・教具などにかかわっていることの意味とその子の発達の方向の理解に努めながら、その場における子どもの求めに答えられる様工夫しなければならない[4]。

こうした点からも、先の「2、絵本の位置づけ」で考察されたように、まず、子どもの姿に注目することが求められる。個々の子どもの発達を捉え、その教具・教材としての絵本が、現在、目の前の子どもにとってどのような意味をもっているのか、どのような発達が見通せるのか慎重に吟味されねばならない。しかし、現場における援助はその瞬間瞬間に適切に行われることが求められる。特に3歳児のように自我が強く、K男も自分なりの「やり方」で活動しようとするが、本事例でも一見「絵本を読む」という意思を見せながら、実は自分なりの情緒の安定を図った本当に遊びたいことへの足がかりだった。保育者は絵本本来の教具としての視点にとらわれすぎることなく、子どもの生活経験と発達の現状、その子の心情を把握しその場に求められる援助を効果的に行わなければ発達支援の機を逸してしまうことにもなりかねない。本事例のように、K男自ら選んだ絵本の意味をしっかり汲み取り、絵本を「媒体」として活用することで目に見えたK男の心情の変化がその姿勢から見て取れたことに注目したい。

4．子どもの発達の見通し

平成11年「幼稚園教育要領解説」第2節「幼児期の特性と幼稚園教育の役割　1、幼児期の特性」の（1）幼児期の生活」で「幼稚園においては、教師や他の幼児たちと生活を共にしながら感動を共有し、イメージを伝え合うなど互いに影響を及ぼし合い、興味や関心の幅を広げ、言葉を獲得し、表現する喜びを味わう」ことや「幼児は、それぞれの家庭や地域で得た生活経験を基にして幼稚園生活でさまざまな活動を展開」していること、そして、「新たな生活の広がりに対して、幼児は期待と同時に不安感や緊張感を抱いていることが多い」ことから「幼稚園生活が幼児にとって安心してすごすことができる生活の場となるため

には、幼児の行動を温かく見守り、適切な援助を行う教師の存在が不可欠」であると記述されている[5]。また、「(2) 幼児期の発達　ア　能動性の発揮」では、「幼児は、興味関心を持ったものに対して自分からかかわろうとする。したがってこのような能動性が十分に発揮されるような対象や時間、場などが用意されることが必要である。特にそのような幼児の行動や心の動きを受け止め、みとめたり、励ましたりする保護者や教師などの大人の存在が大切である。また、幼児が積極的に周囲に目をむけ、かかわるようになるには、幼児の心が安定していなければならない。そのような心の安定は、周囲の大人との信頼関係が築かれることによって、つくり出されるのもである。」とある[6]。

また、「第1節　幼稚園教育の基本　2　幼稚園教育の基本に関連して重視する事項　(3) 一人一人の発達特性に応じた指導」の「②一人一人に応じることの意味」では、「ある意味で一人一人に応じることは、一人一人が過ごしてきた生活を受容し、それに応じるということなのである。それはまず、幼児の思い気持ちを受け止め、幼児が周囲の環境をどう受け止めているのかを理解すること、すなわち、幼児の内面を理解しようとすることから始まるのである。そして、その幼児が真に求めていることに即して必要な経験を得られるように援助していくのである。」と述べ、また、「③一人一人に応じるための教師の基本姿勢」では、「幼児一人一人に応じた指導をするには、教師が幼児の行動に温かい関心を寄せる、心の動きに応答する、共に考えるなどの基本的な姿勢で保育に臨むことが重要である。」(p.33) とある。そこで、子どもの発達の過程を見通すための参考として、表2「幼稚園教育指導書　増補版」の中の一覧表を取り上げてみる[7]。

ここで、「(Ⅰ) 発達の過程」の中の「幼児の生活する姿」を見ると、「ア、新しい生活に緊張感や不安感があり、教師と共に動こうとする。 イ、家庭で親しんだ玩具や遊具などをもったり使ったりして遊ぼうとする。 ウ、他の幼児とのつながりはあまり見られず、自分が安定できることで遊ぼうとする。 エ、固定遊具やボールなどを使ったリ、追い掛けごっこをするなど体を動かす遊びを好む。」と記述されている。そこで、保育者は、こうした時期を見据えた上で、5領域に示された幼児に育つことが期待される心情、意欲、態度が総合的に幼稚園生活全体を通して教師が指導し幼児が身に付けていけるよう発達の方向を整えねばならない。ここに述べられているような子どもへのかかわりは多様化する生育暦を一人一人把握し子ども理解を深めることによることから保育者の感性と能力が問われることになる。しかし、本事例の中にも見られるように、K男が選んだ「絵本」も「絵本は読み聞かせ」と言う短絡的発想に留まらず、新学期という時期と「表　」に示された「発達の過程」及び、その中の「生活の姿」の「ア、イ、ウ」に見られる子どもの新生活への不安、家庭で慣れ親しんだもの、人間関係がまだ構築できず自分が安定できる物で遊ぶ点などは、K男の一連の活動に対する理解の手がかりになることが分かる。したがって、こうした子どもの発達を見通しを把握しておくことが子ども理解を深める上に不可欠である。

5．教師の役割

ここでさらに教師の役割について確認してみたい。教師の役割については、平成9年11月4日「時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り

表2　発達の過程

	(Ⅰ)	(Ⅱ)	(Ⅲ)	(Ⅳ)	(Ⅴ)
発達の過程	一人一人の遊びや教師とのふれあいを通して幼稚園生活に親しみ安定していく時期	周囲の人や物への関心が広がり生活の仕方やきまりが分かり自分で遊びを広げていく時期	友達とイメージを伝え合い共に生活する楽しさを知っていく時期	友達関係を深めながら自己の力を十分に発揮して生活に取り組む時期	友達同士で目的をもって幼稚園生活を展開し深めていく時期

方について－最終報告」の中に「Ⅲ 幼稚園教育内容の改善」として「1　教育内容の改善の基本的視点」の「(3) 教師の役割の基本を明らかにすること」における（環境としての教師の役割）と（幼児とかかわる教師の動き）が示されている。ここでの「幼児とかかわる教師の動き」では、第1に幼児の精神的安定の拠り所、第2憧れを形成するモデル、第3幼児との共同作業者及び幼児と共鳴する者、第4幼児の理解者、第5幼児の遊びの援助者としての役割があり、実際のかかわりにおいては場面によりこれらの動きが相互に関連することが明記されている。この点から、本事例を考えてみると、「第1」の「幼児の精神的安定の拠り所」として教師そのものが「幼児の居場所づくりとなり心の安定をもたらす」とした点や「第3」の「幼児と共鳴する者」として「幼児の活動が停滞しているときに、教師が幼児と一緒に同じリズムで同じ動きをすること」により「活動の活性化が図られる」とあることから、K男が居場所を自分の席においているとき、その行為を認知し活動を共にすることでそれをさらに安定に導き、そこを基地にして活動が活性化し遊びの広がりを見せている。そして、「第4」の「子どもの理解者」として幼児の「これまでの生活や遊びの歴史を重ね合わせ」ることでその子に必要な援助を見極めることが求められている点では、入園前に身に付けていたK男が「慣れ親しんだ遊び方」と類似した方法で保育者とじっくりかかわることで次第に気持ちをほぐしていったことが見受けられる。さらに、「第5」における「遊びの援助者」として幼児自身が感じている遊びに対する感じ方の読み取りと自分で解決しようとする気持ちを支える援助のタイミングを整え、幼児の主体的行動が形成されるよう教師に求められる役割を考えたとき、K男の心情を読み取りK男の心情の変化に対応した援助の方法とタイミングの面からスムーズなK男の活動が引き出せたことが考察された[8,9]。

ここで、教師の役割を確認したことにより、「絵本」を教具であり教材として認識した上で「保育の媒体」として個々の子どもの発達を家庭や地域における子どもの入園前後の生活体験と連携させて、子どもが示す活動の読み取りから今後の発達を予測でき、教育効果を期待できることが考察された。

Ⅳ　まとめと今後の課題

保育者がその子なりの発達の方向に適切なねらいをもって援助していくためには、目の前の子どもの姿から一人一人の発達の現状を学ぶことがまず第1に求められる。子どもにはそれぞれ、本人なりのペースや方法、手順など本人が身に付けている生活の仕方や感情の流れがあることを理解し、保育者は徐々に園やクラスにつくられていく園生活の流れにやがて子ども自ら合流していけるように無理の無い成長の流れを一人一人作っていくことが大切である。必要な時期に一番効果的な教材を選択できる準備を整えておくことは重要であるが、それが子どもの意志と反するものでは保育効果が期待できない。また、教材の持つ本来の意味も充分把握した上で子どもの発達支援の媒体として活用することができる保育者の力量が問われることになる。本事例で考察されたように、保育はあくまでも子どもの発達を見据えた保育のねらいによって実践されねばならない。特に絵本は昨今の子どもにさらに身近になっている現状を把握し園生活中心の視野にとどまらず、すでに身に付けた子どもそれぞれの経験を視野に入れた保育に取り組まねばならず、短絡的に「絵本」=「読み聞かせ」という観念を持ちすぎてしまうことに留意しなければならない。同じ絵本でもねらいによって扱いや読みかたを変える目安は、今、何のために絵本を扱おうとしているのかと主役であるべき「子どもの発達」と子どもの姿から見出した「保育のねらい」に根ざして判断し実践に移されるべきである。したがって、それらを見抜き実践できる保育者の実践力をどのように身に付けるかがさらに学生指導の大きな課題である。そこで、授業の内容として理論と実践を結びつけた保育のイメージをさらに具体的にする教材の準備と指導の必要性を実感したことから、今後の授業内容の改善に努力したい。

【註】

（1）（初等教育資料　幼稚園教育年鑑―平成9年度版―11月号　p.50～57）

（2）（保育用語辞典 2004.　p.139, 142）

（3）「保育基本用語辞典」第1法規　岡田正章・森上史朗他　昭和63年4月　p.280

（4）平成8年2月15日幼稚園の園具・教具等の整備に関する調査研究協力者会議 1999.　ミネルヴァ書房　p.241

（5）「幼稚園教育要領解説」平成11年　文部省　フレーベル館　p.7, 8

（6）「幼稚園教育要領解説」平成11年　文部省　フレーベル館　p.11

（7）「幼稚園教育指導書　増補版」平成元年 文部省　フレーベル館　p.109

（8）「幼児とかかわる教師の動き」（最新保育資料集 1999.幼児保育研究会　森上他編　ミネルヴァ書房　p.142

（9）時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り方について―最終報告　平成9年11月4日　時代の変化に対応した今後の幼稚園教育のあり方に関する調査研究協力者会議

【参考文献】

1．最新保育資料集　幼児保育研究会　ミネルヴァ書房　1999.

2．最新保育資料集　幼児保育研究会　ミネルヴァ書房　2005

3．初等教育資料　幼稚園教育年鑑　平成8年度版　文部省小学校課・幼稚園課編集　文部省　平成8. 9

4．初等教育資料　幼稚園教育年鑑　平成9年度版　文部省小学校課・幼稚園課編集　文部省　平成9. 11

5．保育用語辞典　森上史朗他　2004. 10　ミネルヴァ書房

6．幼稚園教育指導書増補版　平成元年 12/　文部省フレーベル館

7．幼稚園教育要領解説　平成11. 6　文部省 フレーベル館

8．保育基本用語事典　岡田正章他　第一法規　昭和63年

9．現代保育用語辞典　岡田正章他　フレーベル館　1997.

10.「絵本とは何か」松居直著　日本エディタースクール出版社　1994.

Nagoya Ryujo (St. Mary's) College, Annual Report of Studies, Volume 27, 2005

The Use an Illustrated Books for the Children's Development
— A Perspective on the Professional Ability of Nursery Teachers —

Nagane, Rikiyo*

新学期の新入園児は保育者が子ども理解も不十分なうちに日々目覚しい変化を見せていく。そうした子どもたちへの初期への対応はその後の園生活を大きく左右することにもなる。そこで保育者は、個々の子どもの発達課題に応じた援助のタイミングや効果的な媒体をいかに見出し活用できるかが問われることになる。こうした時期の媒体として絵本は、園具・教具として幼稚園に欠くべからざる教材であると同時に、どの家庭にも子どもに与えらている園生活と家庭を結ぶ媒体である。本研究では3歳男児K男の姿から絵本を発達援助の媒体として捉え、登園や遊びに消極的だったK男が慣れ親しんだ絵本を通しての保育者とのかかわりを手がかりに、望んでいた遊びへスムーズに移行することができた。この事例からも分かるように、園具・教具には教育環境としてそれぞれ特有の意味や目的があるが、それのみに捉われず子どもの発達に即した媒体として捉え、その場に求められる柔軟な発達援助の方法を実践できる保育者の力量が身につくよう学生指導に努めねばならない。

キーワード：*子どもの発達，絵本，園具・教具，教材活用，保育実践*

**Nagoya Ryujyo (St. Mary's) College*